

望郷参

映画文学人生論

3001) 虚空遍歴 山本周五郎
3002) 不ぞろいの林檎たち 山田太一
3003) 伊豆の踊子 川端康成
3004) 或る「小倉日記」伝 松本清張
2005) 大地の子 山崎豊子
参考：宮部みゆき (1960) 『ソロモンの偽証』(2002-2011)

私は標的を失った殺し屋だ。

『望郷参』として選んだのは次の五篇。

虚空遍歴	山本周五郎
不ぞろいの林檎たち	山田太一
伊豆の踊子	川端康成
或る「小倉日記」伝	松本清張
大地の子	山崎豊子

どこかに私の個人的な望郷の念を誘うものをふくむ作品ばかりだが、解説しても意味がないような気がする。その代わりに、宮部みゆきの法廷ミステリー小説『ソロモンの偽証』で目にとまった文章をいくつか引用することにした。文学とは何かをあらためて考えさせるセリフがさりげなく挿入されていて、読者を純文学への郷愁を誘う。

一九九〇年十二月二十四日は、電気店の店主小林修造にとっては孫たちとひとつ屋根の下で迎えるはじめてのクリスマス・イヴだ。修造は朝の食卓に向かって、我が身の幸せについて語った。

人生晩年の幸せは、すべての人に平等に用意されているものではない。列に並んだ者には誰にでも手渡されるものではない。待ってさえいれれば手に入るものでもない。並んだ列が間違っていないくても、自分の分はなかったということだ。だってあるし、そもそも並ぶべき列が最初から存在していな

望郷参

映画文学人生論



©2015 「ソロモンの戯曲」製作委員会

いことだつてある。

娘は照れたような顔をして、お父さんがそんなブンガクテキなことを言うなんて信じられないわねと笑った。

城東第三中学の裏庭で男の子の死体が発見されたのは翌朝のことだ。二年生の柏木卓也で、雪のなかに仰向けに横たわり、生前の彼の表情そのままに、すべてに無関心そうな冷淡な目つきで空を仰いでいた。警察が調べた結果、自殺と発表された。遺書はないが、「人生に意味はあるのか」とか、「人間は何のために生きるのか」などという問題を深く考えるタイプだった。

「私は標的を失った殺し屋だ。……私は標的と、それが失われた理由を求めて、灰色の街を彷徨する」という小説のような文章が綴られたノートも発見された。

時是一九九〇年、金融バブルがはじけかけた頃の話だ。自殺か他殺か。真相を知るために学校裁判を提案し、自ら検事を引き受ける藤野涼子は母と次のような会話をかわす。

「じゃ、お母さんはこんな景気がいつまでも続くわけないと思ってるの？」

「うん、何にでも終わりはあるもんね」

「それは素人っぽいというか、ブンガク的な観測ね。不動産鑑定士とは思えない」

私が私を失うと、背中の重荷も消えていた